

歴代誌第二33章10-13節 「ここまでの赦し」

1A マナセの反逆

1B 光に照らされた息子

2B 公然の反抗

3B 迫害者

2A 主の取り扱い

1B 主の語りかけ

2B バビロンへの捕囚

3A 神の豊かな憐れみ

1B 大いなるへりくだり

2B 大いなる王国

3B 主を知るマナセ

本文

私たちは、歴代誌第二の学びの最後に入ります。33章から36章までを午後に読みます。今朝は、33章10-13節に注目してください。

10 主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうとしなかった。11 そこで、主はアッシリヤの王の配下にある將軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕え、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。12 しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、13 神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った。

私たちは今朝、ユダの国の中で最も極悪のマナセ王について見ます。彼がしたことは、異邦人やカナン人も青ざめる、恐ろしいことをしました。けれども、いま読んだ本文のように、なんと主は彼の罪を赦し、彼を再び王国に戻されています。

聖書には、「この人は赦されてはいけない」と思われる人を神が赦される恵みを数多く書き記しています。すぐに思い出すのは、ヨナ書にあるアッシリヤの首都ニネベです。アッシリヤは、テロリストも青ざめる、被征服の民に対する酷い仕打ちで有名です。ヨナは、イスラエルの民がアッシリヤによっておぞましい仕打ちを受けていたので、主によってニネベに行きなさいと命じられた時に、ニネベとは正反対のタルシシュ行きタルシシュの船に乗りました。結局、彼はニネベに行く召しに応答しますが、彼は、「あと四十日でニネベが滅ぼされる」と説教しました。ところが、王を始め、ニネベの人々が悔い改めて、悪から立ち返ろうと努力しているのを見て、主は災いを下すのを思い直された、と

あります。ヨナはこのことに怒り、落ち込んでいたのです。

神による罪の赦しは、あまりにも憐れみ豊かで、私たちはそれを信じるのに力、勇気が要ります。教会で何人かの方が、ご自分の救いの証しを書いてくださいました。そして書かれなくても、口頭で救いの証しをしてくださった方々もおられます。その時にいつも頭をよぎるのが、「自分の過去を書くことは恥ずかしい。」あるいは、「その暗い過去を思い出したくない。」ということです。けれども、十字架につけられたキリストに一心に目を向けていれば、その苦々しい過去はそのまま、甘い癒しをとともう美しい話に様子が変わります。「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」とあるとおりです。

これまで、自分はものすごい罪人だと思っていたけれども、神の前ではもちろんすべてが同じように罪深いのですが、自分よりもはるかに罪あることを行なったことのある人がクリスチャンになっているのを見て、驚いたことはありませんか？私は自分自身の罪のことを思うと、牧師になんか絶対になれないと思っていました。ところが、アメリカの教会の中にある牧会者の訓練校の中には、喜びと恵みに溢れた学生がたくさんいましたが、その一人一人の証しを聞いて目を丸くしました。九割は元麻薬常習者で、ある兄弟は人生の半ば以上を牢屋で費やしたと言っていました。神の恵みによって、今の私なのだ、という言葉、圧倒的な恵みの中で恐れをもって語っているのです。

そして、アメリカにおいて、ジェフリー・ダーマー (Jeffrey Dahmer) やデビッド・バーコウィッツ (David Berkowitz) など、全米を震撼させた、猟奇的な連続殺人の犯罪者が、刑務所の中で真実な回心をして、別人に変わったという証言は数多くあります。その時に数多くの方は、クリスチャンでさえも、そのような人が天国に入るなど決して考えられないと言います。残された遺族は、そんなことを決して受け入れないだろう、と反発します。しかし、これはマナセも同じでした。彼は、自分が罪を犯しただけでなく、他者に強要し、従わない者たちを殺していきました。しかし、神は赦され、再び王の位置に戻されたのです。今朝は、あまりもの深く、大らかな恵み、その罪の赦しを見えます。

1A マナセの反逆

1B 光に照らされた息子

マナセがなぜ極悪になったのか、を考える時に、彼の父親がユダの歴史の中でも最も霊的で優れた王ヒゼキヤだったということを忘れてはなりません。最も偉大で、霊的な父から、どうして極悪王が生まれ出るのか？という衝撃を私たちは受けますが、しかし、それが現実のものとして聖書は描いています。

ヒゼキヤは死に至る病にかかり、それを癒してくださるよう主に願ったら、主が治してくださいました。そこで、さらに十五年間、寿命が引き伸ばされたのです。ヒゼキヤが死んでマナセが統治を始めたのが十二歳ですから、マナセの誕生は、その引き伸ばされた人生において与えられたもので

した。マナセが見ていたのは、エルサレムがアッシリヤから解放された後のユダ国でした。非常に富が集められて、周囲の国々もユダに仕えているという、栄光の時でした。ヒゼキヤは霊的な人ですが、時に高ぶりによって晩年は失敗もしています。けれども、基本的に問題はなく、非常に霊的な環境であったことは確かです。けれども彼は、王になって始めたのは、父が取り壊した高き所を築き直したことでした(3節)。

人間の罪の性質は、光が始めから与えられると、その中で真理に導かれて主に仕えようと思う人がいる反面、光と神の知識があるからこそ、ない人たちよりもより一層、反発し、反逆する人もいます。聖書の中では、黙示録 20 章で、キリストが治める千年王国が書かれています。何の問題もないその国で、千年経つと、悪魔が解き放たれて、その悪魔に従う人々が無数に現れることが書いてあります。信じがたいことですが、いやむしろ、光に照らされたからこそ、罪はより一層、反発し、反逆しようとするのです。

共産主義の父マルクスも、ロシア革命の父レーニンも、親がユダヤ人で、しかも改宗したキリスト教徒でした。マルクスは十代の頃は、キリストをたたえる詩を残している程でした。もっと身近にするために、近くの国で、現在進行形で起こっている例を挙げましょう。今でもキリスト者を強制収容所に入れ、聖書を持っているだけで公開処刑にする北朝鮮の創始者、金日成の両親は熱心なクリスチャンで、父は長老派の教会の牧師でした。光に照らされていたからこそ、その反発も激しいのです。

2B 公然の反抗

そしてマナセは、公然の反抗を行いました。表向きは主に仕えて、周囲に異教の祭壇を築く、というものではありませんでした。歴代誌第二 33 章は、主の宮の中にこれらのものを造った、と強調しています。「彼は、主がかつて、「エルサレムにわたしの名がとこしえにあるように。」と言われた主の宮に、祭壇を築いたのである。こうして、彼は、主の宮の二つの庭に、天の万象のために、祭壇を築いた。(4-5 節)」これは、実に恐ろしいことです。これを今に例えると、教会では主を礼拝して、家でこっそりとポルノを見るというのではなく、教会で平気で眺め、眺めるだけでなく実際に不品行を行う、としたらどうでしょうか？想像もしたくない不埒なことです。

罪というのは、光に照らされるのを避けて隠れる性質を持っています。「悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。(ヨハネ 3:20)」コソ泥が白昼堂々と泥棒をしないように、隠れて罪を行うものです。ところが、その反抗心が極まると、表で堂々と神に反抗するようになります。聖書では、終わりの日に出てくる偽教師がそうであると言っています(2ペテロ 2章参照)。大胆に不品行を教会の中で行い、それは自由をもたらしていると言いつらします。また、終わりの日の反キリストは、大声で神を冒瀆する言葉を吐くことも書かれています(黙示 13:6)。

マナセは、偶像を設置し、祭壇を造っただけでなく、オカルトにも傾倒しました。その一環として幼児犠牲も行いました。「また、彼はベン・ヒノムの谷で、自分の子どもたちに火の中をくぐらせ、ト占をし、まじないをし、呪術を行ない、霊媒や口寄せをして、主の目の前に悪を行ない、主の怒りを引き起こした。(6 節)」以前もご説明した、モレクへの犠牲です。性的倒錯を異教の儀式の中で行い、その結果、望まぬ妊娠をします。この赤ん坊を生んでから、金属で作られたこのモレク像を火で熱くして、その両腕に赤子を乗せて、その泣き声をかき消すために太鼓を使ったと言われてい

3B 迫害者

そしてマナセの悪は、これで終わりません。彼は、自分でこれらの忌まわしいことを行なっただけでなく、それを民に唆し、行いなさいと言いました。「しかし、マナセはユダとエルサレムの住民を迷わせて、主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。(9 節)」まず、彼は王であり、指導者です。指導者が行っていることは絶大です。その下にいる者たちは、影響を受けないではできません。そして、その権力者が罪を犯すように仕向けたら、それに抗うことは自分の身に罰を招きます。

今、仮に私が説教壇からこう話したらどうでしょうか？「それでは、みなさん。この礼拝が終わったら、身支度を整えてください。千代田線にいっしょに乗り、明治神宮前で降ります。よろしいですか、お賽銭も忘れないでください。明治天皇が祭られている神さまのところに、私たちはクリスチャンとして向かいましょう。」私が適当に、聖書のシリア人ナアマンが、王が異教の神の宮で寄り添わなければいけないけれども、どうすればよいのか？という御言葉を出します。皆さんは、どう行動に出るでしょうか？いっしょにお参りに行きますか？それとも、「今すぐにでもこの礼拝から退席して、この教会とは別れを告げる」とすぐに思った方はどれだけいますか？この決断がすぐにできた人が多ければ多いほど、私は御言葉をきちんと教えていたなと誇れます。このように指導者が、唆すことは容易いです。そして、指導者の言うことに抗うことは難しいです。しかし、人ではなく、主に従っているとペテロが言ったように、私たちはいつも主にあって指導者に従います。

そして、歴代誌には書いていませんが、列王記第二 21 章 16 節には、「罪を犯したばかりでなく、罪のない者の血まで多量に流し、それがエルサレムの隅々に満ちるほどであった。」とあります。主に従うと決めた人々を大量に迫害し、殺していったものと思われま

2A 主の取り扱い

これだけの悪を行ったマナセですが、私たちが見えれば絶望しか見えません。誰かが彼を暗殺するか、神ご自身が彼を打たれるか、どうにかしてもらわないと困ると思います。けれども、神はマナセに対して、そうはなさいませんでした。

1B 主の語りかけ

主は初めに、語りかけておられます。10 節をまたご覧ください。「主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうとしなかった。」主は、すぐに初めから大声で語られません。それは柔和な方からです。イエス様が地上におられた時の態度が、それでした。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。ついに、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む。(イザヤ 42:1-4)」

主は、私たちが人格的に、この方を知ることができるようにして下さいます。理屈ではなく、説得ではなく、少し目を閉じて、その言葉の背後にあるイエス様のご人格も感じ取って、それでご自身に付いてきてほしいと願われます。しかし、そうした神の声を人は聞こうとしません。柔和さを、その含みを持たせた意味の深いお言葉を自分の心の高ぶりや頑なさによって振り払ってしまうのです。そして、「はっきり言ってくれないかな。」といらつきます。そうです、主ははっきり語って下さいます。しかし、それは神の厳しい取り扱いの始まりなのです。

2B バビロンへの捕囚

もう一度、11 節を読みましょう。「そこで、主はアッシリヤの王の配下にある將軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕え、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。」なんとマナセは、アッシリヤによってバビロンの地に捕え移されたのです。神はこれを、マナセに語りかける方法としてお取りになりました。

私たちは、そのまま主に聞きしたがって平安を得ることもできますし、このように非常に辛い方法で主に従うこともできます。要は、主の前に出ていくとにどれだけ早く、主に抛り頼まなければいけないことに気づけるか？ということです。

3A 神の豊かな憐れみ

そしてマナセは、へりくだります。「12 しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、13 神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。」

1B 大いなるへりくだり

彼が父祖の神の前に大いにへりくだりました。彼は幼い時から教えられていたこと、アブラハム、イサク、ヤコブの神を思い出しました。そしてモーセによって神が律法を与えられたことを思い出しました。そしてダビデが、イスラエルの王としての手本であることを思い出したでしょう。これらの正しいことは、父ヒゼキヤから教わっていたことでしょう。正しいことは、心の中で分かっていたのです。しかし、その良心への問いかけに彼は反発をしていたのです。

似たような回心をした人で、使徒パウロがいます。キリスト者を迫害し、ダマスコで彼らを捕縛するために歩いていると、復活のイエス様が彼の前に現れました。そしてこう言われました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒 26:15)」この「とげのついた棒」とは、牛が畑を耕す時に付けられる、突き棒であると言われます。なかなか言うことの聞かない牛の後ろに、突き棒を向けおきますと、牛がいやがって足で蹴るごとに、その尖った部分が脚の肉に食い込み、痛みが増すのです。イエスが真理であると、うすうす分かっているのに、正しいと分かっているからこそ必死になって反対することを行っていました。けれども、それは自分を痛めつけるだけであり、パウロはイエス様が現れた時にへりくだって、受け入れたのです。

皆さんに語られている神の声はないでしょうか？むきになって反発していることはないでしょうか？これまで、神の恵みに応答して大いなる働きをしてきた人々は、パウロのように元反対者であったということが多いです。なぜ反応して、反発するのか？それは、語っている言葉が正しいと分かっているからです。最大の敵は、生ぬるさであることが黙示録3章、ラオデキヤの教会に書いてあります。ガラスのように固ければ割れます。しかしゴムのように弾力性があれば、いつまでも壊れません。どうか、壊れてください。そして主の前にへりくだりましょう。

2B 大いなる王国

そして、神はマナセの祈りを聞かれて、なんと彼をエルサレムの彼の王国に戻してくださいました。これほどの悪いことをしたマナセが、全く同じ地位に戻してくださったのです。これで思い出すのは、もちろん放蕩息子です。彼は父親の家に戻る時に、僕となる覚悟でした。なぜなら、父の相続財産の分け前をすでもらっていたからです。しかし、父は息子に指輪をはめて、祝宴を開き、彼を息子として迎え入れました。このように、マナセは裁きを免れただけでなく、神の恵みを受けたのです。

私たちはどうしても、過去にある負い目によって、自分は神から祝福されないのではないかと、思ってしまいます。神によって祝福が半減されてもよいと思ってしまいます。神からの好意は、それほど受けないだろうと自虐的になっています。その負い目があるからです。しかし、神の恵みはそのようにさせません。キリストにある、ほとばしるような恵みが、その負い目に関わらず溢れ流れるように注いでくださるのです。

3B 主を知るマナセ

そして最後に、「こうして、マナセは、主こそ神であることを知った。」とあります。マナセは、信者ではありませんでした。この時に初めて、信者になりました。父ヒゼキヤに育てられても、それが自動的に信者にさせなかったのです。けれども、今、主こそ神であることを彼は知りました。皆さんはいかがでしょう？自分が、周りがクリスチャンだから自分もクリスチャンだと思っていないでしょうか？そして、自分がこれまでしてきたことが、主の命令とは真っ向から反対していることを知ってい

ながら、それに反抗してきた、ということはないでしょうか？そのことを悔い改めて、ただイエス様だけを主にして、その罪を捨てるなら、イエスこそが私の主である、とすることができるようになります。

そして、彼の悔い改めはその後の生活に、はっきりと表れました。多くの人が、「私は謝りました。」と言うのですが、実際は以前と変わらない生活をしています。口だけの悔い改めになっているのです。けれどもマナセは違いました。問題は、民はマナセのように悔い改めなかったということです。罪については、マナセから影響を受けました。けれども、悔い改めについては影響を受けませんでした。そのまま悪を行っていったのです。

私たちは、どうでしょうか？悪い仲間からもらった悪習慣をまだ続けていないでしょうか？それとも、キリスト者が悔い改めたという証しを聞いて、自分も主に祈り叫ぼうとされたでしょうか？罪は他人から他人へ伝染します。けれども、聖めは他人から受け取ることができません。この人の近くにいたら、自分は聖くなることはないのです。ただ主ご自身に叫び求めなければ、聖めは得ることはできません。

ですから、一人一人が、今、神の前に立っています。この方に、ご自分が応答しなければいけません。主は、悔い改める者を見捨てるどころか、憐れみ、栄えさせてくださいます。